QSK（Pleasure Ship）第三種郵便物認可　通巻 2817 号　2008 年 6 月 27 日発行（付録）

2008 特定非営利活動法人 北九州DARCセミナー

さ迷うように生きる子どもたち

～女性の薬物依存からの回復と支援～

拝啓

入梅の候、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。

さて、この度北九州ＤＡＲＣは女性の薬物乱用・依存に焦点を当てたセミナーを開催致します。青少年の非行、そしてその中に潜む薬物問題が社会的に取り上げられており、10 代の女性の薬物問題もとても深刻です。女性は薬物問題と共に性問題や育児、出産といった男性とは異なる部分での問題を抱えている場合が多いのです。ＤＡＲＣでの電話相談や来所相談、また他機関からの要請も多い中、女性の回復支援についてセミナーを開く運びとなりました。この度のセミナーでは青少年と長年一緒に暮らしてこられた自立援助ホームのスタッフや女性回復者の講師、そして女性の薬物依存当事者を招いて皆様と共に考えていきたいと思います。ご多忙中とは思いますが皆さんのご参加を心よりお待ちしております。よろしくお願い致します。

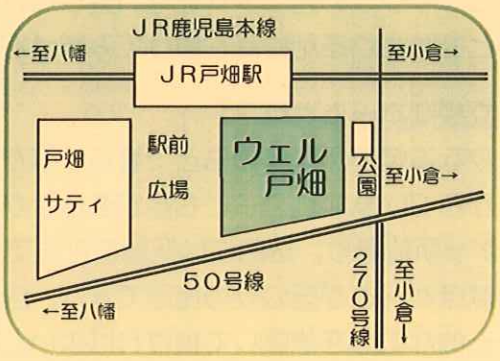
敬具

日　時　：　平成２０年６月２８日（土）１３：００～１６：３０（受付開始１２：３０～）
場　所　：　ウェル戸畑　多目的ホール（北九州市戸畑区汐井町１－６）
参加費　：　５００円
問合せ　：　北九州ＤＡＲＣ（０９３－９２３－９２４０）

※ 駐車場は台数が限られていますので、公共交通機関のご利用をおすすめします。

プログラム

13:00～13:05　ご挨拶 特定非営利活動法人 北九州ＤＡＲＣ 代表理事　佐藤誠
13:05～15:20　「女性の薬物依存からの回復と支援」上岡陽江（DARC 女性ハウス代表）
「子どもたちと暮らして思う事」三好洋子（憩いの家非常勤スタッフ）
「生き辛さを抱えていた子ども時代～アディクションとセクシュアリティ～」
倉田めば（Freedom ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ＆大阪ﾀﾞﾙｸｾﾝﾀｰ長）
シンポジウム「さ迷うように生きる子どもたち」上岡陽江、三好洋子、倉田めば
15:20～15:30　休憩
15:30～16:30　女性の仲間の話
16:30～16:35　ご挨拶 北九州ＤＡＲＣ施設長 堀井宏和



主催　特定非営利活動法人　北九州ＤＡＲＣ
共催　北九州市立精神保健福祉センター
　　北九州市シンナー等薬物乱用防止推進本部
後援　北九州少年サポートセンター・北九州ＤＡＲＣを応援する会

このセミナーは２００８年度公益信託北九州市青少年健全育成基金「積木の箱」の助成金により開催されます。

上岡陽江（DARC 女性ハウス代表）

薬物・アルコール依存症、摂食障害からの回復者であり、自助グループに通い続け、回復プログラムを実践し続けている。依存症の女性の回復と、現在は特に依存症の親をもつ子どものプログラム作りに力を注ぎ、仲間と共に施設の運営に奮闘を続けている。一児の母、エレファントカシマシの熱狂的ファンでありライブは欠かさない。2000～01 年度厚生科学研「薬物依存のアフターケアに関する研究」研究メンバー。著書『虐待という迷宮』。2003 年精神保健福祉士。

ダルク女性ハウスとは？

DARC 女性ハウスは、女性に限定した「安全な場所」の必要性を感じ、1991 年東京に設立された。女性の薬物依存症者の多くは、子ども時代に様々な形で虐待や暴力被害を受けており、薬物使用はそれらのトラウマの自己治療である場合が珍しくない。薬物依存の背景には、貧困、暴力、虐待、性虐待があるにもかかわらず、ほとんど省みられていない。さらに女性の薬物依存症への理解を広めていく事を目的に 2002 年には NPO 法人化された。

倉田めば（Freedom コーディネーター、大阪ダルクセンター長）

尾道市出身。大阪写真専門学校卒業。1993年フォトグラファーの仕事をやめ薬物依存回復施設「大阪ダルク」を設立。薬物依存者の回復のサポートを続ける。2002年、薬物依存症からの回復を支援する市民団体「Freedom」を多くの賛同者とともに設立。新たな社会資源の創出に向けて奔走中。ピア・ドラッグ・カウンセラー。

Ｆｒｅｅｄｏｍとは？

薬物依存症からの回復支援を多角的に展開する市民団体。大阪ダルクの後援母体であった大阪ダルク支援センターが発展的解消をして 2002 年 3 月に発足した。ダルクとの協力関係を軸に、薬物依存電話相談、家族の個別相談及びグループワーク、拘置所に収監中の薬物依存者へのインタベンション・プログラム、セミナーの開催、出版、DVD 制作、予防教育への協力、刑務所での薬物依存離脱指導への協力などの事業を展開。当事者、家族、専門家が立場を超えたネットワークを組んで回復支援に取り組んでいる。

三好洋子（自立援助ホーム「憩いの家」非常勤スタッフ）

世田谷にある自立援助ホームで非行少年たちのサポートを行って 29 年。思春期の少年たちはどのような思いで自立援助ホームに辿り着くのでしょうか。ホームで待ち受ける三好さんと少年たちの交流はどのように始まるのでしょうか。ホームの暮らしは、長い人生のなかで人との関わりの出発点になるのでしょう。三好さんは、子供たちからよく怒り、よく笑い、よく泣くと言われていました。若い頃にはヤクザの組に少女を奪い返しに行ったという武勇伝もお持ちのようです。夜中の公園で少年たちと交わされる話に耳を傾けてみませんか。

自立援助ホームとは？

様々な事情で保護者のもとで暮らす事ができず、かつ自立するにはいま少しケアが必要とされる、15 歳から 20 歳前後の子ども達が働きながら生活していくための場を提供する民間の施設です。全国に 40 ヶ所位あり、法的には児童福祉法で児童自立生活援助事業に位置づけられます。児童自立支援施設はほとんどが国公立の施設ですが、自立援助ホームはそれと全く違い、あくまで民間のグループホーム的なものを想像して頂ければよいと思います。子どもたちがこの自立援助ホームに辿り着く経路は様々で、その中には少年院や家庭裁判所から来る子どもたちもいます。